編集後記

2024年１月１日元旦を迎えた能登半島地方にマグニチュード7.6、最大深度７の巨大地震が襲い、甚大な被害を与えた。同地震は、「能登半島地震」と名付けられ、多くの死者、行方不明者　避難者が確認され、東日本大震災、熊本地震などに続く日本に大きな被害をもたらした震災となった。特に、半島部分の水道、電気、ガス、道路などのライフラインが破壊され、物資や人の輸送が滞っている。亡くなられた方々のご冥福を祈ると共に、一刻も早い支援活動を願いたい。2011年の東日本大震災の時、宮城県石巻市にボランティアとして、大学としても、個人的にも、支援活動に参加したが、日本は地震大国としていつどこでも地震が発生する可能性がある。日本だけではなく、世界でも大地震や自然災害が発生しており、気候変動災害と共に地球上の複合危機として、今後人類は一緒に協力・支援活動を行っていく必要がある。今戦争どころではないはずであるが、世界の戦争は終わらない。それが悲しい現実だ。

本号の特集は、「いま、なぜグローバル・サウスなのか」である。ベトナム戦争パリ和平協定、チリ・クーデターから半世紀が過ぎ、かつて第三世界諸国、非同盟諸国、発展途上諸国といわれた国々は、23年５月のＧ７広島サミット開催以来グローバル・サウスという用語で政府・学術・メディアで頻繁に言われるようになった。グローバル・サウスとは、BRICS とその他の途上国を指すのか、など用語の混乱も見られる。そこで本号では、３名の研究者から論潮一つ、論文二つをご寄稿いただいたが、どの寄稿も力作で読み応えがあった。

最初の松下論潮は、2023年６月24日のアジア・アフリカ研究所の研究会でのグローバル・サウスの議論を振り返り、事務局の鰐部氏の「記録」を基に５つの論点を絞り、その意味、議論、課題を展開して評価しており、グローバル・サウスの概念を再考し、重要な問題提起となっている。

第２の藤本論文は、ベトナム戦争期のアメリカによるカンボジア爆撃の経緯・実相・その帰結を通してベトナム戦争を再考している。ポル・ポト政権誕生の一要因はアメリカのカンボジア爆撃にあること、爆撃の過程でカンボジア民間人に多大な損害を与えたことを指摘し、アメリカの空爆が懲罰的性格を帯び住民に対する脅しと恐怖を与えるものだという藤本の分析は鋭く、説得力のある論文となっている。

続く後藤論文は、チリ・クーデターから50年の歴史を振り返り、なぜ社会主義の新しい実験を目指したアジェンデ政権が挫折し、ショック・ドクトリンの事例としてのピノチェ軍事クーデーターが行われたのか、その後の「成熟した新自由主義」が「軍政なき新自由主義」体制の支えとなったのか、体制転換のボーリチ政権を誕生させた市民の抵抗運動もそれだけではアジェンデの社会変革の理念の実現とはならないことを後藤は深く問いている。

また李投稿論文は、カンボジアで中国企業により建設された大規模ダム「ストゥン・タタイ水力発電所」の「環境影響評価（EIA）」の手続的欠陥が発生する原因を分析し、その背景には中国企業の姿勢とカンボジア政府の意向があることを指摘し、国際基準の「クリーン開発メカニズム（CDM）」に登録し排出権取引を通じた収益獲得をするために追求されたことを明らかにしている点で、高く評価できる。

最後に、今回の本誌の編集作業は、鰐部行崇（編集担当）により行ったことを付記する。

（2024年１月　編集長　重田康博）